

# 縄文と弥生

# 目次

C	O	N	T	E	N	T	S
シンポジウム組織委員会挨拶						石井 紫郎	2
文部省挨拶						林 一夫	3
<b>第1章 縄紋・弥生と現代</b>							
縄紋・弥生と現代						佐原 真	8
*人類史における縄文人と弥生人の位置づけ 現代人との違い							
<b>第2章 縄文</b>							
1 旧石器から縄文へ 居住形態と食糧・資材の調達を軸に						岡村 道雄	16
*“日本”について							
2 縄文人						馬場 悠男	26
*骨から考える縄文人と弥生人の起源							
3 火山灰に消えた早咲きの縄文						新東 晃一	40
*火山灰が九州の縄文文化に与えた影響							
4 縄紋巨大施設の意味						林 謙作	54
*縄文時代の墓							
<b>第3章 民族学から見た縄文文化と弥生文化</b>							
民族学から見た縄文文化と弥生文化						佐々木高明	70
*考古学と民族学							
<b>第4章 第一の道具・第二の道具</b>							
第一の道具・第二の道具						小林 達雄	80
*縄文の土偶							
<b>第5章 弥生</b>							
1 弥生人						松下 孝幸	88
*渡来人とは							
2 米・鉄・墓と社会						甲元 真之	104
*縄文から弥生への移行							
3 銅鐸の祭り						春成 秀爾	113
*銅鐸の起源と使用法							
4 弥生のアクセサリー						木下 尚子	122
*アクセサリーの役割							
5 弥生の戦争						松木 武彦	136
*縄文と弥生の戦争の形態							
6 大型建物の登場と王墓の出現						高倉 洋彰	145
<b>第6章 弥生から古墳へ</b>							
弥生から古墳へ						金関 恕	156
*種子島出土の“山”の字							
演者紹介							168

\*は参加者による討論

# 縄紋・弥生と現代

佐原 真

国立歴史民俗博物館副館長

## はじめに

このシンポジウムでは、縄紋(縄文)・弥生文化を特徴づける課題と、それぞれの文化をになう人たちをとりあげ、それに加えて、旧石器(岩宿)から縄紋へ、弥生から古墳へと前後をおさえる一方、アジアの民族学という広い視野から縄紋・弥生文化を位置づけたいと思います。

縄紋といえば、今、三内丸山に関心が集中しています。しかし、以前から有名な秋田県大湯の規模をうわまわる環状列石が土のなかにまだ眠っている(秋田県脇神伊勢堂岱)ことがわかってきました。これについては、林謙作さんから詳しい報告があると思います。また、縄紋時代の竪穴住居の屋根に土がのせてあったことは以前から指摘されているところですが、それが非常によい状態で残っています。しかも、入口の上に天窓まで残っていることから、家の構造をよくつかむことができるようになっていきます(岩手県一戸町御所野)。

さらに、島根県加茂町の岩倉から出土した銅鐸(図1)が1996年11月22日現在で、38個になりました。鹿児島からは<sup>14</sup>C年代で9,000年前、すなわち縄紋早期の道路跡が発見されています。これは現在たどれる道としては日本最古です。

考古学は明日をも知れない学問であるため、このシンポジウムの開催中にも新しい発見があるかもしれません。

本シンポジウムでは学界を代表する人たちが、最新情報の分析を含めて縄紋・弥生文化を解き明かしてくれることになっていますが、この集いが21世紀を目指す日本考古学のさらなる研究のひとつの出発点になれば、と願っています。

## いろいろな呼び名、いろいろな考え方

さて、林さんと私は“縄紋”と書き、ほかの講演者は“縄文”と書いています。シンポジウムの表題や挨拶などは多数決で“縄文”としました。

みんなの考えが一致していない点はそれだけではありません。岡村道雄さんは、縄紋の始まりを13,000年前と考え、小林達雄さんは12,000年前と考えておられます。

高倉洋彰さんが縄紋時代晩期ととらえる佐賀県菜畑や福岡市板付下層の水田や福岡県曲り田・那珂などの村跡を、金閑恕さん、春成秀爾さんや私は、弥生時代早期(あるいは先期)ととらえています。また、近畿の研究者が都出比呂志さんの提案以来認める弥生期を、高倉さんは 期に含め、 期という呼び名は使っていません。

このように考えが違う人たちが集まって話の筋が通るのか、と心配されるかもしれませんが。しかし、学問は、違った考え方を闘わせてこそ前進するものです。いろいろな考え方がでている分野こそ、活発に進んでいるといえるかもしれません。

以下に、旧石器(私のいう岩宿時代)・縄紋・弥生の年代観をお話します。

### 縄紋人・弥生人と われわれとのかかわり

まず、人類の起源をかりに450万年としておきます。そして、岡村さんから詳しい説明があると思いますが、人類が日本列島に登場したのが60万年前であるとしておきます。

この450万年の人類の歴史、そして60万年前以来の日本列島の人類の歴史のなかで、われわれはどのような位置を占めているのでしょうか。先端科学の発達は著しく、いろいろな意味でわれわれは頂点をきわめていると考えておられるのではないのでしょうか。理性や知性、思いやりの程度なども昔の人ははるかに劣っていて、われわれはその頂点にいますと考えがちです。早い話、100年前、200年前の人たちよりわれわれは進んでいると考えていませんか。

それは、誤りです。例えば、100年前にルノワールやセザンヌ、ゴッホやゴーギャンが描いた絵はどうか。そして、ベートーベンやモーツァルト、バッハは180年、200年、二百数十年ほど前に存在していました。現在、あれだけの音楽を作曲する人がいるでしょうか。また、1,000年前の『源氏物語』は……。このようにさかのぼっていくと、彼らよりわれわれのほうが進んでいるとは必ずしもいえないのではないのでしょうか。

おもしろい話を聞きました。チンパンジーの研究が進んでいますが、チンパンジーの研究家はチンパンジーを何匹とは数えません。



図1 島根県加茂町岩倉遺跡出土の銅鐸。  
大きな銅鐸のなかに小さな銅鐸をいれた  
“入れ子”構造になっている。  
(共同通信社提供)

何人と数えるのです。チンパンジーを殺すことは殺人だという研究者もいます。“チンパンジー”といってもよいかもしれませんが。そのチンパンジーと人の知能を比べるとどうでしょうか。人は動物の知能を人の知能の基準で計ります。そうすると、チンパンジーは人より劣ることになります。ところが、チンパンジーの機能を基準にすれば、人のほうが劣っていることがあるそうです。

縄紋人・弥生人のもつ知識と、われわれの知識を比べた場合、われわれのほうが進んでいるといえるのでしょうか。われわれが知っていることで彼らが知らないこともあります。彼らが知っていて、われわれが知らないこともたくさんあると思います。